



大内
立
十杉傳
第三輯
卷一

於
202
6

15
202
6



行仁義為
室宇修道
德為廣
完

賢齋書



十松傳三編序

志望するべく之の致すに
こと偽おはまれば其れ
浮世代のありと一争世
傳ふるに中をなすに
すめり能く其の魂の
ち道はるるは其の
の心おひくはるる
神にあらむはあらし

202
6



十松傳三編序

敬亭
主人
歌川
因安画

十臣百切
千唐
道路非
之意



十本多三編一

口ノ一

秋光
菴
桂素

後継

文政十一年の秋
後継



夢 妖 不 勝 善 政
 怪 不 勝 善 行
 宋 瑞
 義 婦
 阿 千 賀



災 妖 不 勝 善 政
 夢 怪 不 勝 善 行



英傑あり



勇 八 島 揚 山 を ぬ
 楚 の 項 王 が 右 不 分
 忠 八 無 恤 が 衣 を 斬 ちて
 智 伯 が 為 に 冤 と 報 ちふ
 晋 の 豫 讓 に
 差 べ ぶ
 計 謀
 武 器 の
 遅 延
 張 平
 孫 子
 豫 備
 才 備 ぶ
 嗟 一 個 の

杉 坂 藏 人
 光 忠



小女
雪三

龍の子ハ
小三

降る
雨と
を



桂藏
一子
丸
後
杉
呂
瑳
太
郎



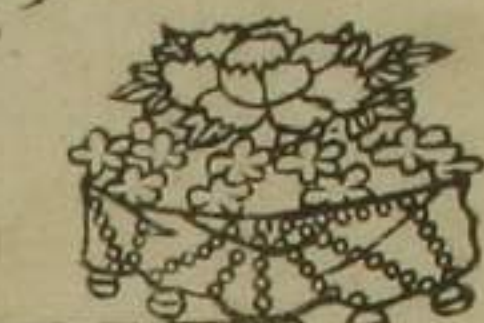
鳳凰ハ
邪の
超境の
勢あり

杉倉
伴
作

杉
多
谷
門



秋月
桂
藏
阿
信
家



新刻稗史

每部有音
章字號雲
顧君子須
認此為真

春水



彫版奏其工
裝演呈其精

大内家十臣

- 杉谷多門
 - 杉隼人
 - 杉坂藏人
 - 杉江七郎
 - 杉倉伴作
 - 杉山主水
 - 杉邑瑳太郎
 - 杉戸十郎
 - 杉本梢之助
 - 杉田路之助
- 是則十本杉

欽納 十杉傳卷之十一

第廿二回 少年避難到信陽

佳人節と守りて其人にあらざれば寢席と俱にせぬ良賈黄金と蔵めて其要不當らざれば用ひほど其職其心と脩むるあり。美人一人毎よ愛さる所そまに随つて流奔せば終に衆人憎む。黄金ハ諸用と弁むるもの。そまを随つて費はくさば終に飢寒の患ひと曳べ。あま信濃の国佐久郡に八代といふ所あり。片鄙るまども此邊ハ上田坂木へ遠くらむと猪布と鬻く商人多し。中ふも植科屋佐久平ハ数代続き一豪家にて奴婢ども数多あるるに生管頑ハ八稚きより父も母も死別せ。



くるるに此と佐久平が。良きなりて家不養ひ。此年廿歳と三ッ四ッ
 超て。伶俐弱官るり。佐久平夫婦。いとち。歡び。吾々。今。八年。差
 て。果敢。さ。く。ハ。活生。と。勢。む。度。ふ。る。り。ご。こ。あ。お。不。頑。ハ。が。その
 人性。質。朴。ふ。く。く。ち。振。舞。さ。賤。く。く。ば。ま。こ。並。々。の。雄。子。と。ち。か。ひ
 夜。歩。行。く。さ。高。も。る。く。大。人。か。る。る。弱。者。る。り。吾。々。女。兒。ハ。持。ぬ。れ。ど
 跡。続。さ。ま。き。雄。子。る。る。色。バ。塔。と。揮。ま。て。世。嗣。不。せ。ま。く。あ。ふ。不。罕。る。る
 彼。頑。ハ。と。女。兒。小。三。不。娶。べ。く。生。中。畠。家。の。子。と。貫。ひ。氣。心。知。ぬ。ぬ。其
 り。ち。ハ。互。に。心。お。つ。お。く。ら。夫。に。ち。ま。う。て。雅。き。し。り。主。と。家。隸。の。名。ハ。あ
 ても。俱。り。育。ち。て。机。の。う。草。帝。と。裂。て。の。雛。下。と。不。渾。家。や。良。人。と
 童。の。戯。也。さ。え。も。後。終。ふ。夫。婦。と。る。る。べき。因。縁。る。ら。ん。と。ら。ち。語。へ。バ

その渾家も。良人が詞の理るれ。俱り。歡び。人。志。に。准。備。と。く
 たり。兵。知。ら。ざ。れ。ど。頑。ハ。ハ。小。三。が。成。長。ふ。ま。か。ひ。驚。る。る。夏。花。洛
 目。も。侍。ま。る。る。も。あ。は。れ。花。の。唇。霞。の。眉。山。の。端。ら。づ。る。女。中。の。月。の。
 目。も。侍。ま。る。る。も。あ。は。れ。花。の。唇。霞。の。眉。山。の。端。ら。づ。る。女。中。の。月。の。
 くの。會。狀。バ。い。と。馬。の。胸。の。暗。影。に。に。え。る。若。草。の。心。つ。い。さ。と
 和。ら。げ。て。い。ろ。ろ。女。夫。ふ。る。ら。坂。や。接。心。も。弱。り。つ。恋。の。重。荷。を。煩。惱。の
 伴。に。ひ。ろ。お。心。の。駒。在。ひ。お。て。は。る。く。ふ。さ。あ。ぬ。浮。世。の。夢。現。も。ひ
 くの。音。も。ぞ。る。く。小。三。ハ。斯。と。も。志。ら。齒。の。處。女。お。の。程。母。が。お。り。く
 に。嫁。入。衣。裳。と。裁。縫。さ。ま。ま。バ。い。と。不。測。な。め。ひ。つ。あ。る。時。母。の。傍。に

幸菱の白綾ハ嫁入の必らどと古た草席や
 小倉の文子も記しつゝあまきま何の料もどて此程より裁縫
 妻も妾と嫁入さん心構ひみや在まこと同くひらまて母あや
 白うらちん穿りて完ふと笑まて袴もいふと遅くらじとあふのうら爺
 々と兩個が心ふ密とおたぬほど冷嘲心ふ平生るぬ衣と怪まて
 何せぞういふと止るん此れど爺の命さるは家隸るれど頼
 八ハいと信実あくと活生のるる賢たりのるれが渠とおん仇が塔と
 して吾々グ跡続せまわくと宣ふつられば是ぞよた縁るらんと吾倫も
 善急げとの入度あまバより支度調へく一日も早く祝言さく
 夫婦の中の睦ましく孫も設けよ彦まをりとおふハ親のまらぞや

ちつハあれども此度とおん仇も頼ハも今日までのいれぬ吾々
 心の裡ハ他るるは美逸早く説話受て世間の人ふ泄るぞや
 植料屋ふてふあぐりいと律調ぬそのさな人の口葉も後影
 さらば準備のるるまで秘ておまねと爺々の命せさまでおん仇が
 くりて同きバそとまこ何まで秘んさらば此度侍女も語りあると
 いふとき小三ハ面と赧らして對居しつゝ母の自あつと瞻望て吐息
 つき親の命さるるまバとこの火水の中にいる度ふありとあむ
 べきははるるまで吾れ心ふ秘る願ひあり此れこのまこと言ふけ
 て腮衿ふさすのまろ口隠る容と母あやが業小相違と額も皺縫
 かけし桂の衣下におきて忽地ふららる笑てと小三エ年が

ゆわねが物毎に。恥ぢる先ふら。倅果敢と。回答さるる。
ぬ。吾儕もおぼえあり。さほどおん此も。や十六心。秘する愿といふ
も。いづる。決う。おねども。配と。死人の余所。あるて。ふ。度。じて。い。ある
べく。だ。さ。言。バ。頑。ハ。と。夫。婦。よ。る。る。も。何。久。苦。う。お。ね。ま。や。り。ま。さ
今。手。で。家。隸。ら。召。は。ら。ひ。ら。雄。子。る。ま。ば。良。人。と。て。冊。く。度。と。嫌。ひ
あ。う。お。ら。れ。ぬ。も。差。生。管。と。り。は。げ。世。と。嗣。し。主。人。の。女。児。は。娶。さ。る。
世。ふ。の。く。例。る。は。ふ。あ。ら。だ。聊。恥。べ。き。度。る。ね。バ。爺。母。の。心。は。隨。ひ。く。
あ。う。は。い。ぬ。と。い。た。ま。さ。て。も。小。三。ハ。何。と。回。答。さ。入。涙。に。く。ま。と。吐。息。は。き。
命。さ。る。所。ハ。三。み。理。と。い。ひ。ら。る。人。と。り。て。良。人。に。せ。え。と。命。さ。る。ま。も。
爺。々。母。母。の。心。は。協。ひ。く。人。ら。夫。も。ま。さ。は。や。く。番。を。侍。ら。ね。ど。

頑。ハ。の。ま。ハ。許。し。て。よ。と。い。ひ。バ。ま。ん。く。自。さ。あ。て。そ。の。何。あ。く。頑。ハ。と。強。ひ
あ。の。ぞ。心。お。ね。と。い。ふ。身。違。ふ。は。え。て。や。主。の。佐。久。平。奥。の。方。より。襖。と
あ。けて。出。来。り。凡。そ。夫。婦。の。中。ら。ひ。の。恥。の。ま。は。も。る。ぬ。の。の。両。個。の
老。の。心。も。ま。さ。む。お。ね。の。威。と。り。て。推。は。る。ま。も。一。生。配。さ。ぐ。ま。さ。ら。う。ま。い。
番。と。お。ね。が。夫。ま。ま。と。い。人。に。詰。ら。う。度。も。あ。ら。ね。バ。止。ま。何。の。仔。細。う
あ。ら。ん。と。い。ひ。捨。て。衝。と。店。へ。あ。り。言。さ。る。る。佐。久。平。が。詞。ハ。小。三。ハ。心。の
裡。勢。び。あ。ら。う。拭。ふ。目。と。母。ハ。え。り。て。小。三。ハ。向。ひ。お。ね。此。ハ。何。と。お。ね
う。お。ら。ね。ど。今。爺。母。の。命。せ。い。ハ。吾。儕。が。育。の。悪。な。ま。バ。恥。の。詞。も。被
是。と。用。ひ。ぬ。不。孝。不。貞。の。女。児。と。ら。う。腹。と。て。お。ね。牙。が。自。と。こ。ん。お。ね
く。眼。の。怖。さ。心。は。ら。う。ま。さ。小。三。先。頃。も。語。り。じ。で。く。お。ね。此。ハ。杉。本

左エ門こそ。鐘一筋の主不在せ。人の女児ふありる。東国の争
 乱ふ果敢る。討死しあひて。いさるひまばわん。此が兄る。梢之助と
 常陸の方に。知音と索めて送りやり。あつしておん身とこらふ。二人
 此国へきて上田の邊に由縁ゆとめて住らう。佐久平刀祢ハ
 ぐらじ生管その外下僕等の。衣食にさへ及びざ。てりて安ん
 のうち。雁の書とて此家へ来り。店の夏より三回の飯着き人等の
 垢つき。衣くら足袋くら。犢鼻褌まで。洗ぎ洗る。二月三月他
 夏る。賄る。真心と。漫不感とて。佐久平刀祢も。家の締り。此
 恥し任し。あつ夫婦の語らひ。其方も此家へ引とりて。僥倖子
 のる。元爺の夏終ふ。女児と。鳴子鳥春の野山。頭挿の花

そ色にもまき。慈々。誠の。親より。信実。足子。伸して。人並。育
 られ。此年月。思の深さ。蒼海も。却て。浅き程。と。奈何。よ
 る。ひて。爺に。恃り。這回。の夏。と。吾も。此上。爺に。腹。と。若も
 此家。と。逐て。天地。の間。吾儕。と。おん。身。兩個。が。恥。と。お。所。し
 此處。の。及。理。と。弁。へ。く。や。心。不。洗。を。も。彼。頑。八。と。祝。言。し。女。夫。に
 る。り。と。あ。ひ。ま。い。ま。ま。れ。が。吾。儕。が。往。来。も。心。易。け。く。あ。る。り。若。も。身
 に。て。は。是。彼。と。雄。の。善。悪。銘。々。の。心。に。惚。ろ。と。惚。ろ。と。あ。る。の。の。の
 是。ど。よ。も。あ。く。畢。竟。家。と。く。治。め。情。心。の。あ。る。人。ら。形。容。は。い。ふ
 醜。く。も。老。行。さ。た。の。樂。あ。り。こ。ろ。け。け。の。美。し。く。女。児。心。も。凡。俗。の
 好。こ。ら。の。と。あ。り。て。も。家。業。務。め。を。墮。夫。て。は。稍。も。家。も。衰。へ。老。て

苦勞と重ぬ。人も花嫁花婿といふくちこそ容貌るれ衣裳
 帯まで花子に仕立てて人の目につみ。早くも子持とるるる。た
 らも悪きも忽地よ移ひ易き世間の。るる人の習ひあり。ちどろ
 容貌にかつらん。よく心とおちつて。母が詞と曉りゆよ。といふ小三
 俯てさらけに回答もせざり。當下生管の頑八が走せまつて障子
 とひらき。其処をうすす。まのつと。小三が母ハハとあて。とち頑八遠
 く。何と云ふと答へらる。檀那ふひのまを度あて。定りに此處の院
 くと。参りてゆといふらちふ主佐久平。楊柳づえ吾に要とい何言ぞと向
 きて頑八とほえ。只今武蔵の川越より。いざや掛合越する仕入
 例のむくハ整ひかね。急々に越ぐて。さる此處より生管のらち。参

きて律と量りま。調ふ度もあるべき。と飛脚到着つたり。最急
 るるすに。あるまじ。計らひやせんやと。いふ佐久平。先
 頃より川越へ推とちらん。と云ふも。ち尋常の人る。調ひ
 難き度もある。といひる。今彼處より飛脚。だ
 けや。目くも猶豫ある。吾のん。六。及。ども。此程より持病
 幾つて。遠路の旅。はるり。か。汝彼處へ赴き。律と計らひや
 せ。と云て頑八。畏れ。と言稟して小奴とつ。旅装してゆ
 へ。ぬ。か。て川越へ赴き。問丸。ども。とら。語ら。律と調ひ
 たり。文月の末に彼處と起行。信濃路へと志が。上野の国
 松枝の駅路。宿と。其夜曉。近づく。何と云ふ



頑八

小三



慈母不
因を
説く
新婚
を
喜ぶ

佐久平妻

鯨波の聲。驟一と云は瀬ハ八邊一く起上り。小奴と僕小庭口より。
立いでこよと云はこゝろふ。此宿忽地火焔とるつて。天と覆ひ。黒烟ハ
夕立雨に叢雲の。風に靡きく走り下り。棟柱の倒る音ハ現る百
万の雷が鳴をこめなて落る下り。乾油も碎けて地にのりうと。おの
ちるりに怖しと云は荷物ハそのまき捨おきて。家るまき方へ立するに稍
不猛火熾ふして。その明き夏益のどく。小奴と兩人送る。田の面の
路よま休らふ。おのく目と目と見えあせと。その無慮ると秋の瀬
八小奴ふ向ひての舟う。こゝろま如何なる事か。おのちと察する。小奴近国
の。兵どもが陣おのり。駅と焼る者るべし。外の荷物ハ危もか。いと
大切なる行李一ツ。路まよふ持いでぬと。途呻吟へる人に隔と。殊

み六氣カ勞と果て。喪ひたることを本意るま。と。たゞ又いつるる物に
おのとも。命に抱る宝ハある。恙るれと。僥倖るま。路用の残りハ
暖み括して。持キと云は今猶あり。いざいざより路を求め。少しも早
く。この難と。道まよふのと。譚らひ。咄と傳ひと。十及あり。此方へ
おまよふ烟の縁に。十三四なる少年の。声と限るに。叫びて。頼ハと云
えて。心の裡よ。いと哀と。とや。おのち。傍みまよ。引起して。汝いつる
もの。このれ。此烟中に。独叫。や。彼驛の。混雜。あて。呻吟。出。其決
語。と。吾々。兩個。旅人。あて。此松枝。旅宿。る。火急の。驛。迷。ひ
ら。この。烟中。と。過る。元より。野路の。往方。知ら。汝土地。の。め
る。坂本。までの。近道。と。教。えて。吾と。伴。る。と。い。ハ。少年。頭。と

搦げ。吾々此方も旅人ふ侍とバ。何れの方か何方にあるりや。道法
さても弁生入るといふ不憶騒動ふ連の人さ。うらまへく生死のあど
知れど。若人々が死果る。西も東も知らぬ。此のうらまへるらん
覚束なく。生る心地も侍らばと一声うらまへく。嘆之をバ。頑八とつら
るるれいと垢染る衣とまをひ。鬢の毛乱れ散れど。何さる賤
き老とくろく。殊に容貌を秀めて物のいひざぬ。風雅より。うらまへる
此を哀れとよむ。いふ。往くるたふらば。吾と俱々此処を去んや。吾信濃
の八代まで。植科屋佐久平が生管有り。佐久平主八情深き。人ふ在せ
伴ひて。便るきおん。此がうと。若くは。憐れみあひく。召おたぬらん。あどて連の
人々と。よく探さる。環とあふ時もあると。曉さぬ。少年は。ちと。此

かる急難。ま。在方。く。歎き。居る。とか。ま。ま。世。も。情。の。由。詞。を。
あり。ぐ。た。ま。で。に。辱。る。く。さ。ら。ば。伴。る。ひ。あ。ら。ま。と。誠。あり。げ。る。頑。八。が。身。を。
て。特。め。ば。此。方。も。点。次。小。奴。ふ。命。と。て。ま。と。引。せ。瀾。々。て。其。夜。の。明。ぐ。こ。
坂本驛。ふ。至。り。つ。要。時。労。ま。と。休。ら。ひ。く。其。夜。の。目。の。故。郷。に。至。り。ぬ。
さて。頑。八。佐。久。平。に。あ。ら。ま。の。は。は。物。語。バ。その。恙。る。ま。と。う。ら。ま。彼。
少年と。近。く。招。き。松。枝。駅。の。危。難。み。つ。ま。て。是。る。生。管。頑。八。が。救。ひ。
は。り。り。少年。う。ら。ま。生。る。は。何。方。名。ハ。何。と。喚。ぶ。ま。と。や。年。ハ。戎。箇。で。連。
の。人。ハ。親。う。主人。う。う。ら。ま。法。ど。と。微。細。よ。ま。バ。少年。ハ。点。次。で。洞。と。名。
ハ。千。賀。松。と。喚。做。さ。ま。て。十三。ふ。り。り。竹。元。ハ。相。摸。の。馬。入。ま。住。い。か。
母。と。姉。と。ふ。伴。る。は。ま。て。這。回。花。落。入。登。ら。んと。出。る。途。ゆ。く。此。災。難。

矢庭に駅と奔走して軍馬のふも遊ばせて。ちりちり二人引
 こつて。十方に。てあり。と頑八主の情より。て辛き。命と佐より。
 是まで伴ひあり。今より何方へ。くべき。この宛所。さへ。伝ら。袖
 へ。ま。る。り。外。あ。る。く。さ。も。祝。族。よ。生。別。を。活。生。べ。も。る。此。の。え。と。
 衣。を。と。あ。と。い。ひ。と。て。袂。と。白。ふ。と。と。く。佐。久。平。是。と。情。等。て。現。ふ
 理。あ。る。汝。が。言。葉。心。の。裡。さ。え。わ。く。量。れ。い。う。往。こ。る。此。の。る。が。吾。に
 仕。え。て。奉。公。せ。し。情。と。う。け。て。召。わ。べ。と。赤。心。も。あ。る。主。が。詞。ふ。千。賀。松
 甚。か。へ。と。は。え。す。る。ま。き。此。と。憐。れ。と。あ。ひ。て。此。家。よ。お。れ。あ。ら。ば。朝。夕
 暖。簾。の。う。け。あ。ろ。く。ま。こ。商。物。の。持。運。び。門。の。掃。除。よ。等。帝。目。の。足。ら
 ぬ。の。教。え。曉。と。て。よ。と。心。細。げ。ふ。ち。ま。よ。る。ん。佐。久。平。い。や。く。不。便。よ。あ。ひ

新しき衣させうえて髪あげとさほつる。とよ清らつる。夏安陵君が
 雅どろ業平朝臣の童容も。是もや。過とを。あ。ふ。と。ふ。佐。久。平。夫
 婦。ハ。他。に。超。て。只。管。よ。愛。し。く。月。日。と。こ。と。ハ。送。り。な。し

第廿二回 依戀情佳人走暗

か。つ。て。月。日。と。送。る。此。の。羊。の。歩。行。障。の。駒。足。ふ。任。せ。て。往。ら。ぶ。其。年
 も。く。と。く。康。正。三。年。の。春。と。る。あ。ら。お。ふ。ち。の。千。賀。松。ハ。ま。ご。年。往。ね。ど
 生。れ。び。で。い。と。も。怜。悧。の。の。る。ま。バ。朝。ハ。渡。ら。起。出。く。店。の。掃。除。よ。主
 夫。婦。小。三。が。夜。具。の。揚。あ。ろ。く。ま。ま。心。は。く。と。猶。さ。ら。に。夫。婦。ハ。ま。ご。こ。が
 の。と。と。く。子。の。で。く。れ。ぬ。の。る。く。不。便。と。く。是。ら。る。と。ふ。千。賀。松。ま。ご。く
 心。と。用。ひ。犬。馬。の。勞。と。尽。ま。よ。る。ん。女。兒。小。三。も。始。の。ら。ち。ハ。祝。族。よ。離。は。し

千賀松が心の裡とものなり。さきま便るくありえんと。あふ心の信より。
 朝あふ心はくこと。こをばつらるるど日教経く互ふ心とあつららに。
 尋常の少年もらむ。とち振舞うら物ぐわら。此処等遊ふも別
 ぬ風流一さぬに女児瓦の深くもあひうひ硯墨より流し持るでの。
 とてどもころぬ胸のうち。あひあがりて細々と心のたけと尽くつ。送る
 玉章と千賀松はもふどもとらば推く。強面のこも會釈はひと
 めひの深き草露とろくめ風情を独りたたく其草のあひま恋
 とぞるりはる。あふ生管の頑八かろぐと六神るぬ。此も聊も
 あるべきる。主夫婦が心の裡と一点まねども豫てより。焦れ
 うらに折とこそ心のとけとろき口鏡ど。小三八耳も笑入も只顧

強面あふらるど頑八もく胸と焦り。回るる眼も恋あへ。初
 てある涙の籠袖の露も末はるふ海とるりるん物あひ。あつた
 小三八椽むきに對居て空と眺むるも。恋しき人の強面るさと仰つ
 心の色に出で。ら。嬾き景勢と夫と六志らで頑八が。あつらえま
 傍へより。小三が袖とそと曳て喃々おん此ハ情るん。心ぐ。作るぞや。
 此程よりして心のとけ。あひの程と茂回ら。いど気強く一点むりも。
 艶しき白く。あひぬ強面むらり女子く。稚き時ハ諸侶も主従の
 名ハありとて。育あふく睦まぐ。慈し可愛と空言あふ。いよと忘
 るあひら。そと今さらみ苛刺あふらひあひハ吾心干て。恋ふ死ねと
 の心。嗟情る。是喃と仰て。小三八袖より拂ひ嗟探らら

何と云ふ。雅あそびの鬼まれかき。今ハ五ノ年園て世間の義
理や人の目も。おのゝるべきふらふら吾儕一個の所へ来て。淫奔がハ
しき真のや。親の許さぬ不義淫奔つや。吾儕が心にあらば其処
除おまて呵らまて。頑ハゆる動ふこそ。猶も緊と把る袖小三ハ
貞とさとと赧めて。喻りくこびらよとて。そまふ氣ハ随うと放せく
とひく拍子に。さらりと裂る振袖の花の袂の断離て。おの寄む
頑ハ。悔り貞と赧らめて。此方の一回へ逃あけ。小三も俱ふ口の
うち。咄々いめて奥の方断離し袖と推あて。あけバあらりと母親が
おのも。ぬ衝立の。護より出て貞えあせ。小三ハ悔りおかく。袖
の破目と左もむき。粹ととわて。おの母親。そまふ今も何処ハ

居て女児るんぞ。人の居ぬ離を。院まここのや。る度ガ
あつとも雄子と兩個さくおの。説話るんぞ。おの。人ガコを
ら。淫奔の。蓮葉るの。と笑ふ。おの。爺も爺は。おの。さぞ
さぞ。腰と。て。おの。小三女児。おの。その。変る。の。先刺
爺々と。此母ガ。寐の。ご。に。其。方。の。此。の。家。の。喜。も。語。つ。く。
嫁入衣裳の。裁縫ふ。不審りの。も。理。と。い。て。ゆ。り。其。時。小。回。答。し。て
の。偽。り。う。そう。さ。おの。涙。で。溢。て。否。か。雄。子。に。配。さ。も。親。の。此
めて。不。便。さ。小。夫。る。り。おの。月。も。おの。おの。新。玉。の。おの。その。間。小
か。其。方。の。心。さ。おの。爺。も。頑。ハ。と。塔。ふ。せ。ま。く。と。先。頃。より。人。事。さ。る
る。おの。不。義。さ。おの。却。て。歡。び。おの。せん。さ。おの。人。あ。る。おの。

そとほめて小三が胸のうち。可笑くもまて腹くしく。おらふふらふくと
どつぐ夫とどまてふ爺おやが。愛ある頑八と。若悪さるふのあ
らバ。吾似と憎まらんくと。あひ量りて白うち。被め。ひやく。吾似と
頑八と。濡奔ぐ。き。夏。傳らば。母。口。い。ゆる。疑。ひ。そ。と。回。答。て。衝。と。往
んとまると。母ハ引とあは。小三。さ。の。ま。隠。し。そ。吾。俯。ハ。志。し。り。や。濡
る。夏。あ。る。と。も。外。の。雄。子。で。る。ま。の。の。と。ん。て。な。ぬ。る。も。親。の。慈。悲。今
も。彼。處。で。兩。個。が。説。話。日。は。さ。ら。く。笑。ね。ど。庭。で。て。遙。ふ。と。ど。ぬ。
是。の。袖。の。断。離。も。何。か。ら。兩。人。が。戯。ま。ふ。引。て。切。る。物。る。ん。と。
い。て。此。方。ハ。猶。さ。ら。ふ。痛。く。る。た。腹。探。ら。む。つ。い。と。で。止。ん。も。便
る。き。巧。為。あり。右。の。ま。み。く。語。ら。ん。と。あ。の。所。へ。父。佐。久。平。彼。方。より

し。徐々。と。出。来。り。て。母。と。子。ハ。さ。あ。ら。ぬ。自。ら。ふ。と。ら。あ。り。別。て
小三ハ子。舎。へ。す。頑八ハ。最。前。より。此。方。の。襖。ふ。り。そ。ひ。く。一。伍。一。什。と
詳。し。き。供。ハ。主人。の。佐。久。平。が。疾。し。り。吾。と。聲。子。て。家。を。嗣。せん。心。根
あり。や。あ。ら。む。と。て。今。ま。で。の。主。の。女。鬼。と。も。あ。ら。ん。と。も。及。な。ぬ。ま。と
あ。も。あ。ら。ん。う。さ。ら。且。心。の。その。程。と。い。て。あ。ひ。と。晴。さん。と。吾。ら。弱。於
心。の。裡。お。づ。く。の。あ。ら。る。念。ま。さ。と。既。に。親。々。口。外。へ。ま。ご。も。さ。び。ど。も。吾。と
めて。誓。み。る。さん。と。并。し。ら。小三ハ。即。ち。こ。の。渾。家。あり。さ。の。ま。ふ。怖。る
べ。き。あ。ら。ば。天。の。眞。加。の。著。く。祈。ら。ぬ。神。の。利益。あり。彼。と。渾。家。に
此。家。と。は。ぐ。愿。ふ。て。も。あ。き。幸。る。り。と。一。個。徒。々。歡。び。て。店。の。く。え
至。と。ど。も。胸。滿。感。と。氣。も。顛。倒。ま。さ。る。此。方。へ。ま。かり。子。舎。に。入

十本杉十一

て耐まくら。猶過去とどむらう。吾らなくに眠る事も。あらで次
ある。一問に。千賀松ひさり。筆とりて向ふ。視や札此の病願と
らる。書の主。が。跡と一心ふ。て。あら。傍へ。蜜々と。足音静に。来り
人と。千賀松。筆と。とり。直し。不圖。え。久。ま。ば。此家の。女児。小三。ハ
傍。て。法。と。と。え。ま。つ。る。ら。札の。服。恋。ふ。被。ら。む。自。ら。ち。覆。ひ
喃。千賀松。工。先。刺。ら。ら。眼。目。も。ふ。ら。む。と。一心。ふ。習。つ。く。唇。分。か。さ
ぞ。や。く。一。気。が。結。ぶ。ま。て。その。果。は。は。あ。る。は。病。ひ。が。出。る。も。知。れ。ど。
折。々。外。へ。出。て。野。で。も。こ。え。り。小。唄。でも。満。ち。て。一。気。と。晴。ま。さ。ぐ。い。ん
こ。ま。六。餘。り。に。少。く。も。今。爺。の。り。賜。り。と。天。門。冬。の。砂。糖。漬。
其。方。に。ぞ。ら。ぞ。遣。と。と。人。の。眼。面。と。よ。や。忍。び。の。人。も。て。来。と

吾倚が心僅るがらも志松の兼といふ鄙言と。必ひのへと。岡ハ千賀松
あつてと。戴き。今に始めぬ。喜るがら。いつる。喜つ。朝夕に。痛り。あふ
市志。現。有。ぐ。く。伝。さ。ぶ。も。人。の。悪。事。ハ。さ。多。く。ふ。い。ひ。罵。る。が。世。間。の
僻。和。君。あり。こ。ら。此。あり。いと。い。は。ける。は。童。に。あ。ら。む。殊。ハ。和。き。み。ハ
主。の。君。が。一。個。子。に。さ。入。在。ま。さ。ま。バ。程。た。く。壻。と。擇。ま。あ。ひ。て。爺。々。の。跡
と。続。あ。ふ。大。直。の。お。ん。此。に。あ。り。る。が。ら。の。仇。め。手。に。名。の。こ。も。ら。ま。バ。和。君
の。お。ん。此。の。ま。ら。は。爺。也。ふ。ま。で。取。う。せ。その。久。斯。ま。で。痛。り。あ。ふ。
此。身。小。も。罪。被。る。べ。く。か。言。さ。ぶ。是。ま。で。の。市。志。と。汲。日。あ。く。己。が
勝。り。と。う。ら。つ。ひ。ふ。言。う。ま。お。ぢ。さん。が。聊。左。様。の。直。に。あ。ら。ね。ど。和
君。ハ。大。直。ま。お。ん。此。の。久。吾。倚。と。て。も。色。く。あ。る。願。望。の。あ。る。此。の。上

且てるるき身と長と三巻の人のことあらば生涯至宝とるりぬ
 べき。母をらひや物漬と朝夕教えぬりて勿体なくも産生たう。
 父母こそも及ばぬ慈悲骨血に流れて辱るまふ。そとらるる君と
 こと。るまき名とこと世の人の胡虜ともるるならん。思とらひて報るに
 怨とらふとてあむ赴きまら。定めて君の庄心小の情ましく憎くも学まひ
 悪くも愛ぬいと。又バ小三の始りまら。千賀松が自ら守り。おもひど
 溢して一番と指の腹めてそと拭ひ其方の詞ハ逸々理悪くまらんや
 りぞ。憎とらひはらんや。さまで過世の因縁。他生の縁とらね共
 其方が此処へ来り。慈と増う胸のらち。馴染まつひと猶さら
 物とらふ。其方の真似立居もらう。自ら。そとらふ。ふと。他

と侍女婢女が戯まこと。心にも嫉し。副とぬ。身の上を
 明らめらる。愚にも断たぬ。おひの鞆。世間の義理も父母の心
 とさへも知らん。生中活生て限るる。嬾と。且暮に涙ととも
 朽んたり。死で冥土で蓮の坐と。とけて待んと。責て此世で
 一回露の情と此ふらひ。黄泉へま。世間。念ひ。む。ま。復る。と
 あ。心は浅ましく。おひ。誥も。此身の因果。そ。程まで。ふ。と。曉く。
 理と。こ。ひ。く。ひ。や。ある。と。猶。う。々。と。い。ふ。ら。ば。愚痴。ハ。女子。の。平生。る。が。ら。
 餘り。執念。く。仇。あ。く。さ。さ。る。此。身。を。凍。ま。す。く。自。ら。さ。ま。も。薄。情。と。こ。み。
 忌。嫌。々。も。此。身。の。覚。悟。所。詮。立。強。く。世。の。義。理。を。守。り。ぬ。ひ。て。劫。が。く。
 雄。夫。心。あ。る。人。と。お。ひ。そ。あ。ら。が。吾。儕。の。過。さ。ら。と。て。今。さ。ら。明。ら。め。て。外。の



小



千賀松

頑八

情郎と添卧し。夫や良人と冊きり。うゝ父母の心不懐ひ世の人々に讃
らるゝも。それをはやく願ひくらげ。いゝおん牙が強面バ吾儕女子の才
るりとも。詮方ありと負祓らめ。悔い涙とたらくと落せば其知らるる書
のふらふ及あまのちりかり。こるるまの霞む目のさたふ。たらふと影質の
後且毛と拂ふ腕を挽げあつととるるどふ千賀松が。まはしく心とお
沈め吾儕が傍に入来あふさ人やこるると吾あらで心と労はつるのふ
泣自あふらうのう。猶さら怪し訝うと人の疑ひたまへ。吾儕ども木
石もは羊で情のあつらるや。そまの今もやせうどく。世ふさあぐの美
理あま固く辞まのりのにけり。さほど斯まで宝ふも抱つるうる命と
めて命とらるりのと此うの香三はらうと否とせせ。今宵亥中の頃及ふ

和君が国房へ入来自に忍びて参りたまへ。努々人に曉らきて。律
と仕損とあつると回答とせうて小三ハ秘ひ羽のまに完ふと笑ふ。盛
の花の眉袂と袖よおあて。必らぎ物とまゝとそと窺ふ其処となら
さりぬ影こんおりて千賀松が。あつと太き息とつき。継しき母の計ひ
小雄夫容に打拵て驛路と測るよりくらふ。おひこらざる騒動の其
災いと適まんと踊るいぞ呻吟牙へ是るる生管の頑ハが情よ
つて漸々と辛き命と助らる。此処へ来てより主が情世ふありぐま
あふくら。此月のうとら明て語まやと名ひいぐ。まど遅くはと等
て。夜の容とそのままに在らるりに小三が恋慕理せめて詞とはくし。
香ても猶うらひの心。心の底の便るる痛くとも慈しきも。いふふ

十本影一

目ぬりのるから。志といはせぬ。女子同士明て。吾ら煩悩と断了。か
 どもありてんと。今口までいひて。さぞも。かく薄命ある吾此の果。今宵
 忍ぶと偽りて。蜜に此処と走り出さん。さるは小三が痛うと。僥倖あり
 あ。此處へ決と一筆書き遺し。おきてんめと独語て。緯の顛末女
 子とめて。雄夫容に打扮し。縁故さか記し。封して。頓て懐ふ。
 其日のころと待らざる女。小三ハ今宵こそ。己まが。卧房へ千賀松が
 忍び来るべき。誓あは。柵不くる鳥と。こして。ハ。暮うと。おもひ。さく。
 い。ね。ど。も。こ。も。頭。つ。心。の。裡。の。嬉。し。さ。と。は。も。悪。く。る。鐘。の。音。の。遠。く
 笑へく。日へく。さ。ね。宵。より。小。雨。そ。る。り。て。い。ま。寒。け。さ。冬。の。夜。の。主
 夫。婦。ハ。お。や。寐。し。り。小。三。ハ。子。舎。に。至。り。て。痲。痺。り。足。の。何。と。も。侍。女

ぞも。吾。白。い。と。こ。ん。て。笑。ふ。又。若。そ。ま。く。と。婢。女。も。気。と。お。き。火。燵。を。こ。ら。せ。て
 火。ふ。女。先。と。温。め。て。や。筆。ふ。ま。ば。寐。し。り。の。鐘。の。響。く。み。ぞ。侍。女。ぞ。も。に。う。ち。向。ひ
 今。宵。ハ。平。生。丁。り。寒。け。に。お。し。此。等。も。な。や。寐。し。り。朝。ハ。疾。う。ら。起。り。て。日。の。晩。ま。を
 何。や。と。ま。居。閑。し。き。此。の。務。勞。ま。さ。ら。ん。と。艶。く。も。い。ま。ま。て。侍。女。完。尔。身。不。お。年
 にも。似。せ。ど。彼。且。こ。と。心。づ。き。て。吾。々。と。痛。り。あ。り。ぐ。き。此。に。添。て。学。び。傳。り
 今。宵。ハ。雨。の。多。り。と。い。て。い。ま。淋。し。く。在。さん。に。吾。々。も。ま。ま。と。眠。く。ハ。傳。ら。ば。志。加
 して。世。間。の。お。れ。物。若。る。に。傳。らん。心。と。ま。お。た。ぬ。ひ。そ。と。異。口。同。音。ふ。さ。る。ぐ。の。怖
 しみ。又。可。笑。ま。さ。ま。の。女。ま。ま。物。語。漫。る。身。と。佳。せ。ば。今。宵。支。中。と。行。束。の時
 の。刺。も。近。づ。き。ん。若。千。賀。松。が。外。へ。来。て。動。靜。と。笑。ふ。心。も。堅。く。契。り。物。る。と。入。と。集
 め。て。三。益。の。雜。談。傳。り。て。妾。が。心。ぞ。と。推。量。ら。ま。ん。硬。ま。さ。と。必。が。い。ま。某。戸。の。風。に。鳴。ま

りそまうと耳引立ても夫ぞさへいひ言ひぬる忍び雄のありとも知らぬ婢女が祝言
嘶も声高く腰を折らう折らう其尾小つと戯言と教書罵る其うち亦告こと
遠寺の鐘おき定い子の刺とさみ撃たえあり暇えさそひく小己が子舎小を入る
跡に小三が眉頻り今宵小浪り生憎に加とせんさう多くと涙もが四方の物ざり
世間の例とてさへ入にさへいひさへぬ人よあやうまゝあぬと便るを目と咳く所
粟戸の礮と音が投燈とさへ送と同き戸と明き人の影もさく只一通の書と
置り切らうらうらとあびてさへ死名ハ小三の君ハ千賀松よりその名とて胸りま
さる椽は跪づき封お切て積下せが雄とるり世といふ仔細のあて如此さうり
此のる果と天にまほて今宵此家とさうは詞短く書はさへ言はるり小三が
気も顛倒さへ女子小ありさうさへさう共此身とて傷とつひとさへ言と設て

かかぬり家出はじりる物小とそ速莫遠くさうは跡おひとあて面とあつせ
鬼も斯もさうりてんと女鬼心の二筋も其まゝ庭の折戸口狂わさる歩行肌足
そむさう雨よさうめらうさうさう走りあさ千賀松ハその夜さういふ此家とまへと
学ん活きあて人々が国房へいと待たれて頭て釜も忍びひで折戸をあひく入者足被
書把て椽におた跡えさうりて先とさう所ハ此方の垣の蔭に居る一個の僻者踊りて
千賀松が右の腕と髪と揃も揃も寄わが居てさへさへ竹登りいと叫んとさう口登り
推らうさう早にかう後興此方の隅よりまこ二個踊らる僻者さう撻らる徳もさうと彼
蜻蛉が如の集ふかりさう博めて物さへいひ引被さ矢庭ハ其れと飛さ直ハ如何
る真と心のもおせれとさうは詮方知らむかて遠く被さ信濃の国の大河さ其
名もあら筑摩川渦ま水の音さう漲き流る真中へ曳声知て投込水入と

りる水音みづねと傳ふ沈しづに千賀松ちかまつが體たいハ浮うつ沈しづる。巖いわと碎くだく荒川あらかわよ美みハうらま
 りかゝる。泡うぶを消けゆく其その折やぶも汀ていの兩ふた個こハ被おもうる。其その試しどろく完まふと笑わらふ。頑がんハ
 刀やいば称な足あし下したが恃たまらぬる九く罪ざいと造つくらせど骨ほね折やぶ銭ぜにハ豫よての約やく束たば束たばふじとて此こ
 懐なつへこのこをこめてて予よむく生なま管くだの頑がんハたとを志こころをこめてて心こころのろもろくは渡わたるる稟ら直ち
 と半なものをを引ひねく又また心こころのろもろくは通とほるる廿にとののろもろくは切きらる善よ思しも
 あらぬ暗くらの夜よハ頻しばしばよりちちちるる白しろ又またのろもろくは取とりて倒たふする紅べにのろもろくは生なま血ちふせみく
 春はるめくは頑がんハたとを志こころをこめてて心こころのろもろくは刀やいば丁ていときりつ血ちをを杖つゑのろもろくは鞆たもとををめてて一ひと散ちふ
 跡あとももここととてて遠とほくは



十杉傳卷之十一終

十

櫻が清く

神

射はす

